

郷土こぼれ話

地域の神様 ② 諏訪神社（代）

－ 代島久輝さんにお話を伺いました －

諏訪神社は、代の八幡神社と合祀されている代島一家の神社です。明治の初めまで、字宮の下に社がありました。現段階では、今春20人参加、参加会員総数で参拝祈願の行事を行っています。

諏訪神社は、万事必勝の祈願の神様で、蚕の成功や豊かな水による米の豊作を祈願した神様です。蚕の絵馬を交換し願いを込めてお参りしたり、湧水の時には神社所有の龍の木彫りと一緒に皆で堀に入って、水をかけ合って雨乞いをしたりすることもありました。昔、この近くの農家は苦労を重ねていたことが思い出されます。

毎年2回の定例で、春と秋に参集し神社・ご先祖様に全員で参拝祈願をしています。春は神社、秋は供養塔場を菩提寺の東善寺からいた



だいて、全員でほこらへ行きお線香を上げ参拝をします。ご先祖をお祭りしているほこらは、大幡公民館の西にあります。当番表で年2回の掃除、特に夏の除草などに努めています。

諏訪神社には、こんな言い伝えがあります。

… 昔、昔、ご先祖様が鶏を飼い、味の良い卵を産ませていた方が居たそう。

諏訪神社（代）

ある朝、鶏が騒がしく鳴くので何かと小屋をのぞいたそうじゃ。

小屋の中には今にも卵を飲み込もうとしている蛇の青大将がいたそうじゃ。主は「ついに見つけたぞ、卵を盗んだのはお前だったのか」と、持っていた鎌で蛇の首をかつ切ったのじゃと……（やれやれ）と主は思った。しかし、主はその夜から「私の首を返せ返せ」という蛇の夢が出るようになったとき。

その後は、鶏に代えて牛馬を飼ったとき。毎日草刈りに出かけ、籠一杯に草をつめて帰る途中、背中がぬくったり、重くなったりしたそうじゃ。「おかしなもんじゃ」と思いながら歩いていたそうじゃが、気になるので振り返ってみると、大蛇が大きな口をあけて今にも主を飲み込まんとしていたそうじゃ。それからというのは何処へ行くにも大蛇が「わしの首を返せ」と追いかけてくるようにじゃと。主はその恐ろしさから悔いを改め、大蛇に「もうしないから許しておくれ」と謝ったそうじゃ。しかし大蛇は日増しに大きく、速くなり、何処へ逃げても追いかけられ、中条まで逃げたが「もうだめだ」と観念し、大蛇に「わしが悪かった。子どもは悪くないのじゃから、祟るのはやめてくれ。その証に腹を切って死ぬから許しておくれ」と。子孫を護らんとの一念から壮絶な最期を遂げた。お陰で村は豊になったのじゃと。子孫はその徳をたたえ、神社の境内に社を建てたり、青大将の代わりに白蛇を祀られたそうじゃ。…（引用：「熊谷市公協だより 第44号」）

大幡の地は、養蚕が米麦とともに重要な産業でした。だから一方ならない願いを込めて取り組んでいました。神様が先祖様を助けてくれたことに感謝の念を伝えていきます。これからは、人々が物心共に豊かさに恵まれる

反面、今以上に社会環境が厳しさを増すと思われれます。皆で少しでも心温まる社会にしたいものです。

文・写真：むらた ひとし

大幡公民館だより 平成27年 8月号